指導計画案

展開	導入	展開
指導上の重点目標	1 小説の特徴を理解させる。 2 作者について知らせる。 3 作品全体を把握させる。 4 背景となっている時代状況について理解させる。	1 全体を場面展開によって四段落に分けさせる。 2 第一段落の内容を、「僕」の言動を押さえながらつかませる。 3 「僕」と別れたガールフレンドとの関係を把握し、「僕」の心情を考えさせる。
学習活動	① 今までに読んだ小説と比べてどういう特徴があるかあげる。 知技 ② 村上春樹の作品の読書経験を聞き、感想をあげる。 ③ 全体を通読して場面や状況を確認し、場面展開を理解する。 知技・思判表 ④ 設定や他の人物の言動から作品の背景にある時代状況を理解する。 思判表	① 〈第一段〉（初め～二三六・15） 「僕」の行動が徐々に広がっていくさまを段落の区切りとして考える。 思判表 ② 自分の部屋の中で「僕」がどういう状況に陥ったか、また、その時の「僕」の心理はどういう状況かつかまえる。 思判表 〈第二段〉（二三六・16～二三八・7） ① 「僕」への対応から見える「彼女」の心情を考える。 ② 彼女が電話で言ったことから、「僕」をどのように見ているか読み取る。 ③ 彼女の言葉を「僕」がどう受け止めたか考える。 思判表
指導上の留意点	① 第一印象をあげさせて、この作品の特徴を押さえさせる。唐突な舞台設定に着目させながら、作品の寓意性に目を向けるように促してみたい。 ② 村上作品の読書経験があるものに感想を求めて、作者を簡潔に紹介する。 ③ 語句の意味を確認しながら特徴的な表現を押さえ、場面展開を幾つかに分けさせる。主人公の行動やその理由を押さえることによって四段構成と考えられよう。 ④ ミレニアムという舞台設定や他の人物の言動等から、作品の背景にある時代状況を理解させる。生徒にとってミレニアムは過去の出来事であるが、現代とほぼ変わらぬ社会状況を背景としていることを理解させる。	① 「僕」の行動が自室から徐々に外部へと広がっていく点に注意して、場面展開のあり方を理解させる。青が消えた状況を比喩を多用して表現している点を押さえながら、「僕」の状況、青が消えていく様子、それに対する「僕」の行動を確認させる。 ② 「青が消える」という状況に突然なったときどうするかという発問を中心に、「僕」にかかわる表現を押さえながら「僕」の状況を理解させる。同時に、なぜミレニアムを迎える夜に一人でアイロンをかけているのか、なぜパーティーにでかける気にならなかったのか発問しながら、「僕」を規定していた心理状況も押さえさせる。 ① 彼女の現在の生活のあり方を想像させる。電話の向こうの彼女の部屋では、賑やかなパーティーの真っ最中である。彼女は「僕」のことなど忘れたように楽しんでいる様子で、青が消えていないかどうかを尋ねるのは場違いであることを理解させる。 ② 会話の表現に注意させて、別れた彼氏である「僕」を、現在の彼女はどう見ているか考えさせる。ここでは「僕」は（他の人から）どういう人間に見られているのか」が大事なので、彼女の真意についてまで踏み込む必要はないだろう。 ③ 彼女に言われて「僕」はどういう気持ちになったのか意見をあげさせる。「僕」に近しい存在であった彼女でも青の消滅を気にもとめていないこと、新しい生活を楽しんでいることが、「僕」の孤立感を際立たせている点に注意させる。

展開		
展開	指導上の重点目標	学習活動
	4 地下鉄の駅員の言動に注意して、ここでの政治の意味について考えさせる。 5 「僕」がひとりで心配していることについて、具体的に考えさせる。	①〈第三段〉（二三八・8～二四〇・3）駅員の返答からどういう社会が読み取れるか考える。 ②「僕」は何について違和感を覚えているのか、それが新しい世紀に入ることとどうかかわりがあるのか考える。思判表
	6 コンピューターがいう歴史の意味を捉えさせる。同様にここでの経済とはどういう意味か考えさせる。 7 なぜ「僕」は小さな声で言うのか考えさせる。 8	①〈第四段〉（二四〇・4～終わり）「かたちあるものは必ずなくなる」「それが歴史」だとは具体的にどういうことなのか、自分の経験から考える。思判表 ②ここでいう歴史の考えと結びついたかたちで経済も意味づけられている。進歩発展がすべてに優先するとどういう社会になり、そこでの人間はどうなるか想像する。思判表 ③青の消滅について尋ねたすべての人に冷たくあしらわれた「僕」の心情を考える。「僕」は何にこだわっているのか考える。思判表

展開	
展開	指導上の留意点
	①駅員の会話はＳＦ的な近未来社会を思わせるが、ここでの政治のあり方を考えさせる。駅員の反応はいろいろな解釈ができようが、この駅員が属する組織は完全な上意下達式で意思決定がなされていること、そして「僕」が住む社会が近未来的な中央集権体制であることに注意させる。 ②「僕」の孤独がますます強められ、その疎外感から、新しいこと、未来から目を背けている心理状態になっている点を理解する。他に青を探そうとするが、時計は午後十一時四十五分を指している。新しいミレニアムを祝う人々の歓喜の高まりと正反対の気分にのめり込んでいく「僕」の心理状況に注意させる。
	①生徒自身の経験を想起させ、身の回りからなくなったものとその代わりにできたものを具体例としてあげさせる。これまであったものが新たなものに乗り換えられることは、社会のどの分野でも見られることである。こうした変化を「進化」「進歩」と捉えて疑わない習性が身についていないかどうか考えさせる。 ②新しさがすべてに優先するとどういう世の中になるのか、それだけで人間は生きていけるのか、現在の状況を考えさせる。前項から一歩前進し、物事が新しくなる裏で多くのものが捨てられ、忘れられていくが、それが人間にどういうものの見方を植えつけることになるか考えさせる。進歩発展が歴史であり、経済の原動力だというコンピューターの回答を批評的にとらえさせる。携帯電話やパソコン、あるいは高度経済成長期やバブル経済全盛期の日本社会などの例から考えさせてもよい。 ③ここでの「僕」は周囲の者とは違って、どういうことを訴えようとしているのかを考えさせる。皆が未来への期待でいっぱいになっている状況の中で、「僕」はひとり青の消滅について思い悩む。また、他の人物との対応などから、「僕」の暮らしている社会全体の仕組みが見えてくる。そこでの「僕」のこだわりとはどういうことか、最後の「僕」の小声の反論を踏まえて考えさせる。

まとめと発展		
1	2	
主題について話し合わせる。 読書活動への発展をはかる。		
①	②	
この作品で「僕」が訴えていること、好きな色だったという気持ちを持ち続けるということは、どういうことかを考える。また、１９９９年大晦日の設定にはどんな意味があるか考える。**主態**	作者と作品について整理し、代表作を押さえておく。「言葉と表現」１～３について調べる。**知技・思判表**	
①	②	
作品全体の寓意性について、個人と社会の両面から話し合わせる。何かが好き、愛着があるということは、そのものの変化や喪失を拒む心理とも言える。それは、本文で言われている歴史や経済の概念とは対立する心情でもあろう。また、本作品が１９９９年の大晦日の夜に設定されているのは、それが最も人々の目が未来に向いている時であるからと考えられるだろう。周囲が日進月歩で変化していく時代状況にあって、新しければよいのかどうか、具体的に考えさせる。	「作者」及び「参考文献」の項参照。幾つかの作品の特徴などをあげておく。読書指導としては、代表作だけでなく、エッセーや紀行、翻訳なども併せて勧めたい。また、「言葉と表現」を調べながら、本作品の比喩や独特な描写などをあげさせて、その効果について話し合わせる。	